

蒔絵

蒔絵とは、塗りたての柔らかい漆器に金粉などの金属粉を塗り、文様を表現する技法である。また、蒔絵とは、このように装飾された作品を指すこともある。日本の漆器では、最も一般的な装飾技法のひとつである。

蒔絵は、8世紀ごろから日本の漆器に見られるようになり、その後、数世紀にわたって全国に広まった。屏風や仏壇などの大型の装飾品から、髪飾りや筆箱などの家庭用品まで、その用途は多岐にわたる。蒔絵は高価な材料と専門的な技術が必要とするため、その歴史の大半は富裕層だけが手に入れることができた。しかし、18世紀に入り裕福な商人層が出現すると、蒔絵師をひいきにするようになった。このような新しい顧客の流入により、アートの用途や表現の幅が広がっていったのである。19世紀半ばになると、日本は国際貿易に対する多くの制限を撤廃し、輸出や芸術の交流が盛んになった。このような状況の中、蒔絵は進化を続け、応用芸術だけではなく、創造的な芸術として国際的に認知されるようになったのである。

蒔絵の技法は、大きく3つに分類される。漆器はすべて、漆（漆の木の樹液）を何層にも塗り重ねて作られる。研ぎ出し蒔絵は、漆を塗り重ねる途中で金彩を施し、さらに漆を塗り重ねる。漆が固まったところで、周囲の漆と同じ高さになるように磨き上げ、デザインを浮かび上がらせる。平蒔絵は、完成した作品の上に漆で文様を刷り込む。その上に金属粉を蒔き、濡れた漆にだけ付着させる。漆は少量しか使用しないので、文様はほぼ平坦に仕上がる。一方、高蒔絵は意図的に盛り上げたデザインである。高蒔絵は、平滑な面に炭や粘土の粉を混ぜた漆を何層にも塗り重ねることで、部分的に盛り上げていく。これにより、高浮き彫りのイメージを作り出し、その上に金属粉を塗布する。

金や銀のほか、さまざまな金属や合金を用いて、色のグラデーションを表現する。例えば、金と銀を混ぜた青金（あおきん）は明るい金色を生成するが、金と銅を混ぜた赤銅（しゃくどう）は赤銅色で、時間が経つと黒紫色の緑青（ろくしょう）を帯びることがある。また、粒の大きさが異なる粉を使うことで、質感や光沢を変化させることができる。

高価で飛散しやすい蒔絵の漆や金属粉を自在に操るために、作家はいくつかの専用道具を開発した。その代表的なものが、竹筒の片側に絹やガーゼを被せて、粉を均一に蒔くための「粉筒」と、液体漆用の親指に取り付ける小さなパレット「爪盤」である。絵柄を崩さないように余分な粉を払い落とすための繊細な刷毛もある。

石川県の工芸品では、蒔絵のほかいくつかの技法が併用されることが多い。平文（粉ではなく切った加工した金属を用いる）、卵殻（卵殻を砕いたもので装飾する）、螺鈿（螺鈿細工）、沈金（金をはめ込む）などである。石川県立美術館には、これらの技法を組み合わせた漆器が多く展示

されている。

蒔絵は 1955 年に重要無形文化財に指定され、最初の重要無形文化財保持者は石川県出身の松田権六（1896-1986）である。このほかにも、石川県出身の 3 人が蒔絵の保持者に認定されている。1982 年に大場松魚（1916-2012）、1985 年に寺井直次（1912-1998）、2010 年に中野孝一（1947-）が認定された。